

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 陳 捷

本論文は、明治前期における日中知識人の学術交流について考察したものである。

明治前期、日中両国の知識人は公式非公式のチャンネルを通して、双方向的な学術文化交流を行なったが、残念ながら現在のところ、それについて系統的な研究はない。本論文は明治前期の駐日清国公使館の文化活動にスポットをあて、当時の両国知識人の学術交流を明らかにしたものであり、主要な狙いは文化交流の実像を把握するとともに、その社会的・文化的背景を認識し、日本と中国のそれぞれの社会転換期における伝統的な知識人の精神的な変容を探るところにある。

全体の構成は、第1部の研究編(330頁)と第2部の資料編(248頁)からなる。研究編は前編と後編にわかれ、前編では、幕末以降における日中文化交流の歴史と、その中における駐日公使館の役割について分析し、後編では、日本に保存されていた古典籍をめぐる日中知識人の交流に焦点をあてている。また資料編は、論者が新たに発見あるいは整理した当時の筆談記録や書簡・外交文書など一次資料の翻字・解題である。

本論文において第1に評価すべきは、明治前期における日中知識人の学術交流について新たな視点にもとづく論考を展開したところである。論者は駐日清国公使館の文化活動のうち、当時を特徴づける古書の蒐集や出版に焦点をしばって調査研究をすすめ、新しい知見を提供することを通して、当時の日中学術交流の、日本と中国の近代学術史における意義について、新しい角度からの考察を可能にした。研究の新たなパラダイムを切り開いた点は、十分賞賛に値する。第2に評価すべきは、基本資料の発掘についてである。論者は研究にあたって、文献学的方法を重視し、日本・中国・台湾・アメリカにわたる広範囲の文献調査を行ない、今までに公刊された資料はもちろん、未刊の年譜・日記・公文書から、当時の日中中国人の筆談メモや書簡類に至るまで、調査・整理の上、最大限活用しており、その資料蒐集の広範さは驚くほどである。

審査委員会は以上にもとづいて、本論文が博士(文学)の学位に値すると判断する。